



『猛禽類学』
山崎 亨監訳

2010年4月 文永堂出版 発行

508頁 定価 18900円

平山琢朗・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学類 感染・病理分野）

例によって研修の一環で書籍紹介を行うので、前半を新人の学生・平山琢朗君にお願いした。中味の概要などはきちんと対応してくれたことに安心、後半を浅川が好き勝手に記した。

（文責 浅川）

本書は米国の National Wildlife Federation が出版した『Raptor Research and Management Techniques』の翻訳本で、猛禽類を対象にした最新研究とその技術を網羅的に提示したものである。25の章内容は次の通りである。関連学術誌など、識別・齢査定・性鑑別、系統、構想・データ管理・分析・公表、調査方法、渡り個体のカウントとモニタリング、行動、食性、生息地調査、巢への接近技術、繁殖成功率とその評価法、捕獲法、マーキング法、追跡調査（テレメ・衛星・安定同位体と微量元素）、代謝、生理（消化管、血液、生殖）、病理（疾病・外内寄生虫）、毒性、保護管理による被害軽減、保全施策、飼育下繁殖、野生個体群と食物資源の確保、リハビリテーション、教育、関係法規。本書でまず驚かされたのは、豊富な引用文献であった。さらに深く知りたいと望む際、極めて有益であろう。第1章でデータベースや学術・機関誌一覧が紹介されているので、初学者にとっては嬉しい。私（平山）が興味を抱いたのは、生理、病理および毒性の各章である。これら類書は存在しても、家禽対象が多く、やや欲求不満状態であったが、本書によりほぼ解消された。野生動物医学研究を志す者として、生態系の頂点に君臨する猛禽類の生体機能や、健康モニタリング、解剖の手順、疾病の知見を得られ、今後の諸活動に奥行きをもたらすことになると感じるし、我々人間がもたらした環境の劇的な変貌による猛禽類への影響は想像を絶し、より一層

猛禽類はじめ多くの野生動物保全に対する興味、関心を深めてくれた。

また、私（平山）がこの7月から配属が決まった酪農学園大学野生動物医学センター WAMC が、時折、傷病個体の搬入があるため、「リハビリテーション」にも関心が惹かれた。野生動物保護が謳われるようになったのは最近の社会現象で、関連書籍も数多く刊行されてきた。しかし、しっかりした治療の知識・経験は限定的である。本書も実践的マニュアルではないが、救護、情報収集、治療行為を行うにあたり最新の獣医療水準に基づく技法の概説が示されており、特に、身体検査や輸送、長期の入院に関して、動物のストレスに配慮するにはどうしたら良いか、救命処置、骨折の処置や、放鳥基準まで紹介されており、今後、ケアをしていく上で貴重なものを感じた。もちろん、こういった技術は、哺乳類や爬虫類などの他の野生動物においても概して当てはまるような気がするが、もっと深く研鑽積もうという動機付けには最良であったと思う。

（文責 平山）

懐かしい写真が目飛び込んだ。p444のデモンストレーションの場は、次の頁で補足される英国立猛禽類センターでのであろう。写真のような猛禽雄姿はとも絵になる。が、私（浅川）が印象を持ったのは、腐った卵を用いたハゲワシ類のショーで、「吐き気を催すような食性であるが、生態系には不可欠な存在で…」と説明する同研究所研究員の「デイス・ガステイング」の発音が、今も耳から離れない。2010年、私（浅川）が Royal Vet と London Zoo との共同開講の専門職大学院（Sainsbury 氏、2001）での学外研修で訪れた時の事であった。そのコースは翌年9月末、終了するが、その時問題になったのが、インドでのハゲワシ類の大量死である。London Zoo の動物病院廊下の掲示板の、現地での疫学調査ボランティアの急募のポスターが目浮かぶ。当時は「謎の感染症」が原因のような捉え方をされていたようであった（が、何しろ9・11直後のことなので騒然とした中、記憶が曖昧）。その後の調査研究で、この死因がジクロフェナク製剤（家畜用非ステロイド系解熱鎮痛薬）の致死性中毒であると判り、鳥類医学の分野に大きな衝撃を与えた。どの程度の衝撃かというと、たとえば、この本では5つの章で、それぞれ個別に扱われた位であった（頁は索引で確認されたい）。しかし、日本の獣医学ではこの事実を知るものはどの程度いらっしゃるであろう。新獣医学辞典編集委員会（2008）にもこのような事例は紹介されず、獣医審議会（2009）の中毒にも記述はない。CiNii で「ジクロフェナク」と「中毒」で検索してもデータ無しであった。p352の「定常的に死肉を食べるハゲワシ類に限らず、実はごく普通に多くの

猛禽類が、悪天候や獲物が少ないときは死肉をあさる」ことは忘れてはならない。というように、この本にはこれからの危険管理のなるようなヒントが多数潜んでいるはずだ。この本に散らばめられた猛禽類の美しい写真にばかり目を奪われず、重要事項を見落とすことがないようにしよう。

さて、もう一度ロンドンのコースに戻りたいが（諄くてすみません）、このコースで最も用いられた情報源は、pubmedでもカレコンでもなく、Zoological Recordであった（冊子体も含め）。この本でもp16、科学的情報源の章のフィナーレとして紹介されている。何しろ、1864年からの文献収録なので、世界最古。私も勤務先の業績をこのデータベースで調査したことがある（浅川，2004）。収録範囲は、いわゆる一流どころの雑誌ばかりではないので、地味なモノも網羅している。猛禽類は派手だが、科学対象としては難しいことがあり（p67の右半分の記述は、猛禽好きに限らず、この学会の学生さんには必ず読んで欲しい）、そのために、公表される論文も有名なデータベースでは引っかけられない雑誌に載っている可能性があるからだ。ちなみに、野生動物医学协会会员がとても興味を示す「疾病と治療」の文献情報としてはp4、右半分の13行ほどで終わっている。とても満足のいくモノではないが、安心して欲しい。そこで触れられたJone Cooperはロンドンのコースのほぼ専属。また、彼女の奥さんMargaretは、本書の法規の第2著者。お二人とも優しく、non clinicの40過ぎのアジア人には、どうしようもなくきつかったコースを精神衛生上健全に乗り越えることができたのは、まさにこの夫妻のおかげであった。（文責 浅川）

参考文献

- 浅川満彦. 2004. Biosis刊 Zoological Recordに掲載された文献データによる酪農学園大学動物学研究の動向. 酪農大紀要, 自然科学 29 (1): 49-55.
- Sainsbury, A., Mark T. Fox, 大平久子, 河津理子, 浅川満彦. 2001. 英国立獣医学校およびロンドン動物園による野生動物医学コースの概要と参加者の印象について. 獣医畜産新報 54: 801-812.
- 新獣医学辞典編集委員会 編. 2008. ジクロフェナク. 新獣医学辞典, 532, 緑書房 (チクサン出版社), 東京.
- 獣医審議会. 2009. 獣医師国家試験宿題基準 (平成21年改訂), pp.94.